

news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA



田中恭吉《梅恨 第一》『心原幽趣』所収 インク・彩色、紙

田中恭吉展拾遺 (その一) 恩地孝四郎・藤森静雄・大槻憲二に捧げた作品と蔵書

12年ぶりの大回顧展となった「生誕120年記念 田中恭吉展」(2012年9月1日～10月14日)では1908年から1915年までの作品や資料約380点を展示した。最後のコーナーで紹介した、その早すぎた晩年、恭吉がとりわけ親しかった三人の友人——恩地孝四郎、藤森静雄、大槻憲二——に贈ったペン画と蔵書について記しておく。

故郷和歌山での病床から田中恭吉は1914年12月、藤森が妹を亡くし悲しみの中にあるのを慰めるためにペン画2点と歌からなる『そがれゆくぬくみ』(図1)を、1915年1月に大槻に宛てた葉書で《絢はわれゆく歓喜と悲哀》(図2)を、そして1915年2月に恩地と婚約者のぶ子に捧げて16点からなる『心原幽趣』I(図3・4)を贈っている。それらは『心原幽趣』Iの序詞にあるように、友情への「感謝のこころ」を示すと同時に「わが 過ぎし日の 墓じるし」となるものであり、「いかばかり 生きのちからの いみじきかを ためさむ」と、田中が自らの生の証を友人たちに遺すため、最後の力を振り絞って描いたものだった。

またその数カ月前となる1914年7月4日付けで、東京の下宿に残してきた物を形見

分けするように依頼する手紙を三人に宛て送っていた。恩地と藤森はその手紙を見て、あわてて『月映』の^{つくはえ}の公刊を早めたのである。

「孝よ、しづをよ、けん二よ。／私は静かに落ちついてゐる／私は死を期してゐる。その時期の遠くないことを思ふ。／最初の咯血(去年)の時は驚いて遺書のやうなものをかいた、こんどは落ちついてゐる、病は静にかつ深い。／私は私のとぼしい財産の中から私を愛して下すった人々にほんの心ばかりの おくりものをしたい。」
「これは私に最も近い孝としづをとけん二にねがふ。／一、青表紙の独逸本の彫刻の方、並に「春宵悲曲」(春画集 孝は決して不快を感じないことを思ふ)を孝

に／一、青表紙のスキッツル画家の分をしづをに／一 これは行李の中でない、君にあづけておいたムンヒの画集を 憲二に」

展覧会では、恩地に贈った「青表紙の独逸本の彫刻の方」と、大槻が持っていた「ムンヒの画集」を一緒に展示することができた。ヴィルヘルム・ラーデンベルグ著『現代の彫刻』(Wilhelm Radenberg, *Moderne Plastik, Einige Deutsche und Ausländische Bildhauer und Medailleure Unserer Zeit*, Karl Robert Langewiesche Verlag, Düsseldorf & Leipzig, 図5・6)とヘルマン・エスヴァイン著『ムンク画集』(Hermann Esswein, *Moderne Illustratoren VII: Edvard Munch*, R.Piper & Co. München und Leipzig, 図7・8)がそれで、ムンク画集のほうは1970年代、大槻の生前



図1 埋葬『そがれゆくぬくみ』1914年12月
インク・彩色、紙



図2 絢はわれゆく歓喜と悲哀
大槻憲二宛書簡
1915年1月7日
インク・鉛筆、紙



図3 悔恨 第一『心原幽趣』I
1915年2月26日
インク・彩色、紙

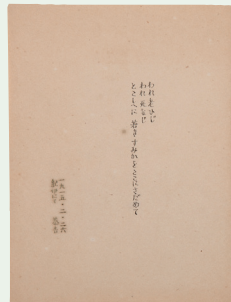


図4 『心原幽趣』I 表紙の裏面
「われ老ひじ われ死なじ
とこしへに 若きすみかを
ここにさだめて」と記している

田中恭吉展拾遺 (その二) 藤森静雄の遺品から



図1

「生誕120年記念 田中恭吉展」会場では、冒頭に藤森静雄による《田中恭吉遺作展目録表紙図案》と、藤森と恩地孝四郎がその遺作展会場にいる写真(図1)を掲げた。

藤森と恩地は、恭吉よりひとつ年上で、昨年生誕120年を迎え、2011年夏の特集展示としてふたりの作品をならべたので、覚えておられる方もいると思う。この3人

が詩と版画の雑誌『月映』^{つくはえ}を作り、大正初期の美術にひとつの花を添えたのだ。

1914年の恭吉没後に奔走して作品を集め、遺作展を開催したのは藤森だった。その後、遺作集を作るために作品のほとんどは恩地の元に置かれて(ただし遺作集の出版はできなかった)、1987年に恩地のご遺族から当館に贈られることになる。

昨年の特集展示の際に、藤森のご遺族から作品資料をご寄贈いただき、また今回の恭吉展に際しても、資料類を託していただけた。先の遺作展会場の写真は、藤森の遺品の中にあつたアルバムからのものである。

恭吉は東京美術学校に入学する以前の白馬会洋画研究所からの友人であった藤森と親密な交際を続け、相互に影響を受

けあい、共に版画を始めたのだった。藤森のアルバムに、恭吉の写ったものがあったのも不思議でない。

一枚紹介しておこう(図2)。少し変わったものだが、手前に雪像があり、右上に4人の人物がしゃがんでいる。左端が藤森でその隣に恭吉、その右は顔が隠れて判別が難しいが「ネコの小母さん」と恭吉た



図2

に当館に寄贈され、12年前の展覧会でも紹介していたが、彫刻の本は、2008年に恩地孝四郎の蔵書の中から見つかったものである。いずれにも田中自作の木版による蔵書印がある。

蔵書印はヒアシンズを中央においた2色摺りで、上に「MARS EX・LIBRIS 1914」、下に「MICH I KT」の文字が刻まれている。「MARS」はフランス語で3月の意味だから、1914年3月、田中が木版画を手がけ始め、恩地や藤森も誘って『月映』の計画が浮上したのと丁度同じ頃に作った蔵書印ということになる。

ほかに、今回展示はしていないが、藤森静雄の旧蔵品だったという蔵書印部分だけの小さな紙片が見つかる（2010年に

開催した「創作版画の名品」に出品、図9）。蔵書票として作られたことも考えられるが、紙の変色の激しさは、古い本の見返しでよく見られる状態と似ている。いささか想像力をたくましくすれば、上記の形見分けの書簡に藤森に贈ると挙げられていた「青表紙のスキッツル画家の分」から切り取られたものかもしれない。恩地は未刊に終わった遺作集のための原稿「田中恭吉の芸術」（『田中恭吉作品集』1997年、玲風書房に収録）で田中がホルダーを好んでいた事を記しており、「スキッツル画家」とはフェルディナンド・ホルダーと推測される。田中の木立や野原の風景を描いたペン画や藤森の『月映』に発表した木版画などの人体表現を見ると、それぞれにホルダーの影響が窺える。

日本でのホルダーの紹介は1910年の『白樺』第1巻第7号ですすでに行われている。そこでは、自然主義に代わって再び台頭してきた「浪漫的文学的傾向」、「日常の現象を越えて純美界に至る」芸術、印象主義の光の観察から「線と色」の権利回復の動きを示す、つまり象徴主義の画家のひとりとしての紹介するものだった。田中の蔵書は彼の関心のありかを示すのみならず西欧の象徴主義や表現主義と『月映』の世界を結ぶ貴重な資料と言えそうだ。

展覧会では、田中の手を離れて一度は友人たちの手もとに置かれた作品と書物が再び同じ空間に集まった。それはまさしく田中恭吉の宇宙ともいべき空間であった。

（井上芳子）

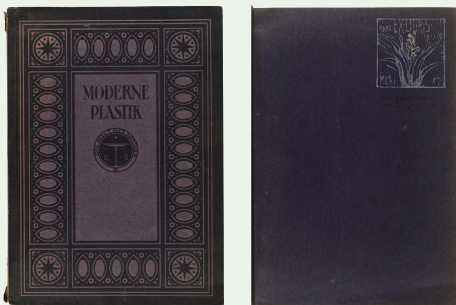


図5・6 遺品『現代の彫刻』（ヴィルヘルム・ラーデンベルク著）個人蔵

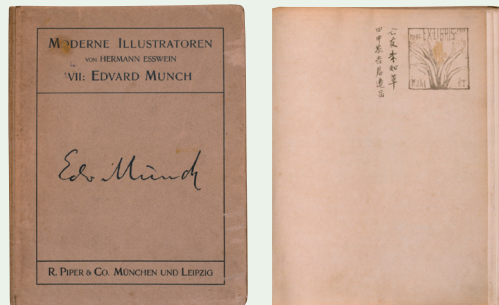


図7・8 遺品『ムンク画集』（ヘルマン・エスヴァイン著）



図9 EX-LIBRIS 1914年3月 木版、紙 個人蔵

ちがよんでいた賭婦の若林かつ、そして恭吉と同居するほど仲の良かった大槻憲二。恭吉はその略血前後（1913年10月）、当時はまだ郊外だった池袋の借家に藤森兄弟と隣同士で住んでおり、おそらくはこの写真は池袋で撮られたものだろう。

恭吉に関連する藤森の遺品は写真だけではない。洛陽堂から公刊された『月映』7号の表紙と裏表紙だけが紙片の状態に残っていて、裏表紙にはペンで「良心院達道居士」と恭吉の法名が書かれたものもあった（正確には「良真院達尊居士」である）。

藤森の遺品の中で、もっとも多いのはもちろん藤森自身の作品である。一部は『版画芸術』の最新号「特集『月映』の青春」（No.157・2012秋）で紹介したが、そのほかにもこれまで知られていなかった、ある

いは藤森のものだとは考えられていなかった作品が多くある。

たとえば『Der Tod』（図3）は、縦29×横25（cm）ほどの木版画である。ドイツ語



図3

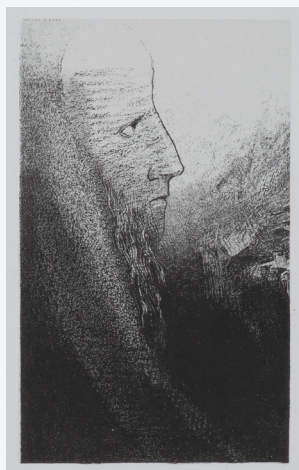
で「死神」と題されている。草の上の^{ひとがた}人型は異様に身体をねじまげており、その存在の苦しみこそが主題のようだ。下に摺り込みのサイン（「S」と「FuZIMoRI」）があり、制作年ははっきりしないが、大胆な構図や荒々しい彫痕などから、『月映』の時代からそう遠くはない時期の藤森の優品だといえる。この作品には色違いの試し摺りも数点ある。

たった23歳で亡くなった恭吉のことを考えるに、藤森の作品や資料が物語ることは少なくない。作品資料をご寄贈いただいた、藤森のご子息である藤森素彦さんにはいくら御礼をいっても足りないが、恭吉とともに藤森の作品をしっかりと紹介できる機会を待ちながら、その声に耳を傾けていたいと思う。

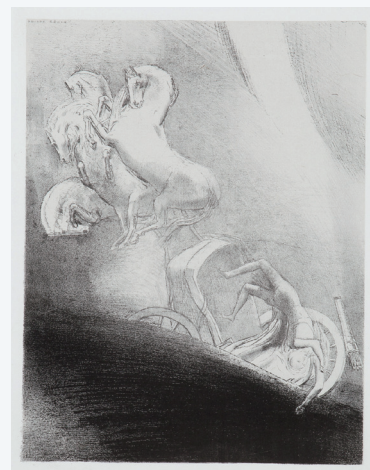
（寺口淳治）



ウジェーヌ・ドラクロワ
ファウストの前に現れるマルガレーテの亡霊
(ゲーテ『ファウスト』による連作より)
1828年



オディロン・ルドン
聖アントワヌ：主よ！助けたまえ！
《聖アントワヌの誘惑》第三集より
1896年



オディロン・ルドン
彼はまっさかさまに深淵へおちてゆく
《聖アントワヌの誘惑》第三集より
1896年

開催中の特集展示「幻想の美術」は、人間の想像力が強く発揮されて生まれた絵画の系譜を、版画と素描を中心に、19世紀から現代までのヨーロッパと日本の作品によってたどる展覧会です。このテーマであれば、本来、同じ展示室に作品が並んでいてもよい、田中恭吉と川口軌外という、本県出身になる、ふたりの画家の回顧展に合わせて企画しました。田中が画集を所持し、イメージを重ねた作品も制作しているムンク、川口がバリで作品を見て、強い影響を受けたシャガールの作品なども会場には並んでいます。

「幻想の美術」というタイトルですが、美術のジャンルとしてそういった分野が確立している訳ではありません。しかしながら、作品を見た時に、「幻想」という言葉で括りたくなる作品群は確かに存在します。興味深いのは、幻想の世界を描き出す表現方法として、版画や素描による表現が非常に効果的であることです。白と黒だけに抑制された色彩、あるいは線描を主体とした即興的な描写、また版の介在によって偶発的に生まれたイメージは、見る者に判断の多

くをゆだねるため、その想像力を一層喚起するようです。

そもそも美術作品は、作者である人間の想像力の産物ともいえますが、作者の意図や構想は、見る側の想像を決して制限するものではありません。本展の最初に作品を展示した、19世紀フランスを代表する画家のひとり、ドラクロワは、次のように述べています。

美しいタブローに、ひとつの定まった思想しか見出さない人は不幸である。また、想像力豊かな人に対して、完成されたもの以外には、なにも提示しえないようなタブローも不幸である。タブローの価値は、定義しえないもの、正確さから逃れてゆくものなかにこそある。要するに、色彩と線に魂を込めたものが、魂に語りかけるのだ。*1

ドラクロワが言う「定義しえないもの」、「正確さから逃れてゆくもの」のイメージを効果的に自らの表現としたのがルドンです。ルドンは50歳になるころまで、木炭や鉛筆、リトグラフによる黒だけを使い、時には文学に依拠しながら、私たちの心の中にある、なにかとらえどころのないものを、幻想の世界として描き出しています。

ルドンは、自己の内面に淵源のあるような世界を描きつつも、作品を見る人間の存在も強く意識していました。ルドンの次の言葉は、少し難解ですが、自らの作品制作の理念であるとともに、自らの作品が見る人の存在によって成立することの言明でもあります。

神秘の感覚、それは常にあいまいさの中にある。二重、三重に見えること、見えるものの疑わしさ（イメージの中にまた別のイメージがあること）、生成するフォルム、見るものの精神状態に従って生成するフォルム。それは眼に見える形で現れるからには、暗示以上のすべてだ。*2

こういったドラクロワやルドンの言葉を読みながら、ふと頭に浮かんだのが同時に展示されていた田中恭吉の作品です。田中の象徴的で、時に具体的な説明が難しいイメージに、見る者が鮮烈に心動かされる感覚を、ドラクロワやルドンが的確に説明してくれているように思えたのです。

田中やこれから展覧会が始まる川口の作品と合わせ、今回の展示では、潜在する曖昧性、あるいは多義性によって、見る者の想像力を刺激する作品が展示されています。作品に表れた筆触や顔料の質感も重要な要素です。感性を開き、ルドンが言う「神秘の感覚」を、美術館でぜひご体験ください。（宮本久宣）



エドヴァルド・ムンク 病める子 1896年



コレクション展によるこそ。

特別展は、刺激的な企画や長い時間をかけて積み重ねてこられた研究成果が見られる絶好の機会ですが、コレクション展にはまた別な楽しみがあります。所蔵作品を紹介する展覧会ですから、どんな展覧会よりもその館のキャラクターがよく見えるのです。

和歌山県立近代美術館のコレクションは、郷土作家の作品を中心に、近代美術館の前身であった和歌山県立美術館時代から営々と築かれてきました。和歌山にゆかりのある作家についてなら、世界の大美術館より詳しいかもしれません。さらに、彼らが生きた時と場所、交わりをもった人との繋がりをたどり、コレクションの幅と厚みを増していこうとしています。

コレクション展は1階の1000㎡の広さがある展示室で開きます。数字で見るととても広い感じを受けますが、いま、所蔵作品点数は10000点以上になっています。そのため、作品を選ぶことが必要です。しかし、ほかの展覧会で必要な場合は、ここでは出品できませんし、日本画や水彩画など、デリケートな作品は作品に与えるダメージを抑えるために展示時間を制限していますから、制限を超えるときには出品することはできません。美術館は、展覧会をする場所というだけでなく、作品を保存し、次の世代に伝えるつとめを持った場所だからです。

珍しい作品は、田中恭吉と川口軌外の回顧展や二人の作風と響き合う特集展示「幻想の美術」で集中して紹介されていますので、コレクション展では雰囲気をかえて、所

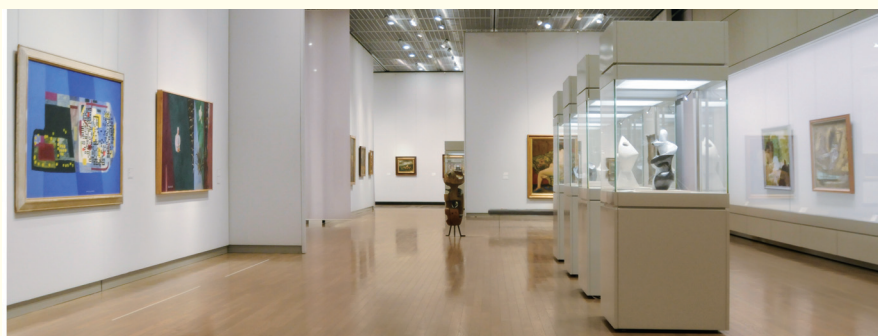
蔵作品のなかでも代表的な作品を出すことにしました。必然的に、いままでにもよく出品されている作品が多くなります。何度か当館へ来られたことのある方にとっては、すでに見た作品です。またこの作品に会えた、と喜んでいただける方ばかりではないでしょう。

しかし、実は、同じ作品を繰り返し見ることは、たいそう面白いことなのです。作品は同じでも、見ている側が年齢も、関心も変わっていくために、前とは別な側面がきわだって見えてくるからですが、加えてテーマや切り口が変わると、作品が新たな見え方をします。今回の「コレクション展2012-秋」では、会期が今年生誕120年を迎える田中恭吉と川口軌外の回顧展に重なりますので、二人が生きた時代の作品を選び、この展示が二人の仕事が別な角度から見る機会となるようにしました。

時間を隔てるほどに、美術作品はそれが生まれた時と場所の記憶から離れ、独立した存在へと変わっていくものですが、もとより、制作は人間の行為ですから、作品がまったく独立して生まれて来ることはあり

ません。作家が好んだ、あるいは学んだ作品や作家ばかりでなく、周囲を取り巻いていた社会状況、文学や哲学、音楽、流行や娯楽を含めたあらゆること、そして作家自身が積み上げてきた制作の経験が一つの作品に結実するのです。

展示室では実際に二人と交流のあった仲間の作品だけでなく、まったく異なる作風による制作に打ち込んでいた人たちの作品もあわせ、ほぼ時代を追って展示していきました。田中恭吉と川口軌外の作品はあえて出さず、出品作の作家たちについて、二人との関わりを中心に短い解説パネルをつくりました。それぞれが生きた跡が、接近し、並行し、交わるさまを読み取り、二人の作品を思い起こしながらご覧いただければと思います。このコレクション展によって、二人の仕事が別な角度から見え、コレクション展の作品も、二人の回顧展によって新たな視点に立つことで、いくつもの発見ができるでしょう。発見を重ねるたびに、一つの作品が自分に親しいものになってくる過程を楽しんでいただければと思います。
(植野比佐見)



「ロマンティックなシンプリシティ」

—ニコラス・フォックス・ウェーバー氏講演会 「アルバース、その人と芸術」



去る7月15日、「なつやすみの美術館2：かたちと色のABC」展関連事業として、ニコラス・フォックス・ウェーバー氏による講演会「アルバース、その人と芸術」*1を開催しました。ウェーバー氏は生前のジョセフ・アルバース(Josef Albers, 1888-1976)と深い親交を結び、作家の没後に設立された財団を現在まで率いておられる美術史家です。アルバースの作品は、本展のポスターや看板にも用い、展覧会の中心的な位置づけとしました。この講演会は、本展の趣旨をご理解くださったウェーバー氏および財団のご厚意により実現したものです。

チラシなどの作品画像、あるいは展示されていた一連の版画作品から、アルバースに対してどのような印象をお持ちになったでしょうか。幾何学的な線や構図、またフラットに塗り分けられた色面からは、一見冷たい印象を受けられたかもしれません。加えて、画面内の要素は制限され、同じテーマを繰り返すことから、ミニマル・アートの先駆と捉えられることさえあります。しかし今回の講演会をお聴きになった方は、そのようなイメージを一変させたことでしょう。「ミニマリズムはものごとをそぎ落としてゆかねばならなかったが、アルバースはシンプリシティ(簡素さ)をとてもロマンティックなかたちで考えていた」という質疑応答におけるウェーバー氏の一節に、この講演のすべてが集約されたように思います。

講演の冒頭でウェーバー氏は、アルバー

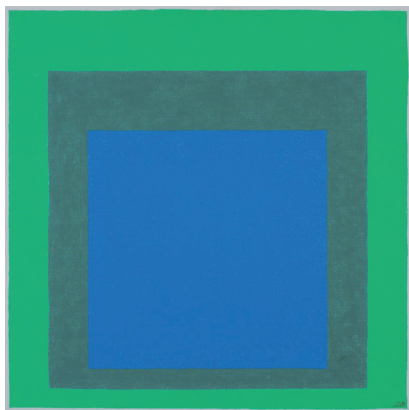


図1 《「正方形へのオマージュ」のための習作》1976年
油彩、メソナイト
© The Josef and Anni Albers Foundation

スの代表作《正方形へのオマージュ》シリーズについて、その構図や比率の厳密なルールを解説されました。そしてこれほど多くのルールを定めたのは、「歴史やそれぞれの個性、時間や場所といったものに左右されない普遍的でシンプルな言語であらわすことで、色そのものを見せようとした」からだと言われましたが、講演が進むにつれ、アルバースが色に込めた本当の思いに、私たちは触れてゆくことになります。

アルバースの色へのこだわりは、例えばこんなエピソードにも垣間見えました。それは、ウィンザー&ニュートン*2のコバルト・グリーンが、色番号192番から205番になってしまったという話です。192番でなければならぬと言うアルバースに代わり、ウェーバー氏は町の画材店に片っ端から問い合わせますが見つかりません。仕舞いには、ウィンザー&ニュートンのアメリカ支社に電話し、支社長に直接交渉までしましたが、「どっちも同じコバルト・グリーンだ」と取りあってもえません。しかしアルバースの名前を出した途端、先方の声色が変わったというのです。そしてしばらくすると彼の手元には、コバルト・グリーン192番が5本入った小さな小箱が届けられたのでした。アルバースの色へのこだわりは、誰もが知るところとなっていたわけです。

このコバルト・グリーン192番を用いてアルバースが描こうとしたのが、図1の作品です。彼の色彩理論を知っている人なら、正方形が前進/後退する違いを読み取ることでしょう。ここでは中央の大きな青い四角形が手前に迫り出してくるようになります。しかしアルバースがこの作品に表そうとしたのは、中央の青で宇宙、次の緑で大地、そしてコバルト・グリーン192番を用いた海でした。かくも壮大な自然を、アルバースはたった3色で描こうとしたのです。

アルバースがこの作品に取り組んでいたとき、写真家のカルティエ=ブレッソン*3が、「宇宙をあらわすのなら、角がなくて端が消えているような、ふくらんだ正方形のようにするべきだ」と告告しました。魚眼レンズで見る正方形のような形でしょうか。しかしア

ルバースは、色そのもので宇宙を描き出せると確信していました。つまりアルバースにとっての色とは、単なる実験ではなく、表現と具体的な効果を支えるために必要なものだったのです。そうして件の絵の具を手に入れた画家は、意気揚々とウェーバー氏に言いました。「ほらね、ニック。真ん中の青を一番大きくしなくちゃいけなかったのさ。僕には宇宙ってものがだんだん近づいてきているように思えてね。」——そしてこれが、アルバースにとっての遺作となりました。

シンプリシタカたちと色へのこだわり、そして時に錯覚的な効果。にもかかわらずアルバースの芸術は、決して奇をてらった目だましのものでも、冷たい機械的な作業でもありません。アルバースが描き出そうとした宇宙や自然、そしてそれらに対するロマンティックな思いが、抑制された画面内の要素に、溢れんばかりに込められていたことが、ウェーバー氏のアルバースへの親しみを込めた一言一言から、私たちに伝わってきた2時間となりました。

[ウェーバー氏からのメッセージ]

和歌山に行き、ジョセフ・アルバースの作品が繊細かつ見事なかたちで展示されている素晴らしい展覧会を見られたこと、さらには私がこれまで知らなかった、ここ50年ほどの日本で活動してきた優れた抽象画家たちの作品が見られたことは、何よりの喜びでした。ジョセフのものの見方について講演をするにあたり、この展示を見て大きなエネルギーをもらったように感じましたし、また来聴者のみなさんが驚くほど熱心に聴いて、理解しようとしてくださったこともわかりました。ジョセフの芸術とみなさんの素晴らしい美術館とのつながりを、これからも期待します。

ニコラス・フォックス・ウェーバー

(青木加苗)

*1 原題 Josef Albers: A Personal Account of the Man and his Art

*2 Winsor & Newton はイギリスの絵の具会社。

*3 アンリ・カルティエ=ブレッソン (Henri Cartier-Bresson, 1908-2004) はフランスの写真家。

「なつやすみ特集 野田哲也」(会期:6月9日～9月2日)にあわせて、8月4日(土)に野田哲也氏によるアーティスト・トークを開催しました。写真を使いそのイメージを騰写ファックスと木版によって作品とする技法や、「日記」というテーマ、さらに制作するうえでの考え方や姿勢などについて、出品作品を中心にその変遷を辿りながらお話いただいたのですが、独自の作品世界が生み出された背景に触れる絶好の機会となりました。

ここではトークのなかで、印象に残った言葉をいくつか書き出してみます。

「考えてみますと、作家にとっては、作品というのは結局絵日記をかくようなものではないかと思うんですよ。何を作っても何を描いても。完全なつくりものであっても。完成したときにサインをする。日付を書いたり、年代を書いたりする。これは絵日記、日記のような行為ではないかと思うんですよ。」

「写真を使うと、再現という意味での写真はできるが、表現という意味では手を加えないといけない。」

「画面には余白といいますか大きい空間をとっています。われわれ日本人は身に付いているんですね。間というのは。間に合わせというような言葉もありますよ。なにもないんだけど、大切な空間なんですよ。」

「名所旧跡を選んだのではなくて、その

人たちがどのような生活をしているのかということに興味があったんですよ。社会的というのではなく、[アースデーなど]ああいうイベントをしているということが大変興味深かったんですよ。」

「何でも写りますから写真は。写真からいらぬものを削ったりする。今それはコンピュータを使って簡単にできるんですよ。でもそれは感性を失うような気がして、気が済まないですね。最近の人はコンピュータで、野球でも釣りでもする。僕は自分でやりたい。自分でサンマを釣ったり。だからそういうことですね。なにか自分の手でこらやらないと。身体性というか。自分の手で料理してやりたいと思っているんです。」

「あんまり騒がしいことはやっていないんですよ。ひとつだけあるんですけど。娘が泣いている作品です。ほかには表情を

つけてドラマティックにしているようなものはないんですよ。表現する場合、色についてもそうなんですけれど、あんまり説明しすぎるとね。想像する範囲も狭くなる。いろいろ想像して見て頂く。作品についてはなんかこう深さを出したいといいますか、考えてもらいたいといいますか、そういうところもあるだろうと思いますが。」

淡々とした口調と時折挿入されるユーモア。主張し過ぎることはないけれども、その根底にある強いこだわりやひたむきさ。トークを聞いていると、野田哲也という人物と作品とがとてもし近い関係にあることが感じられて、なんだかいいなあと思ったのでした。作家の人間性と作品とは切り離して考えるべきという立場もありますが、野田さんの場合、生きることと制作することが地続きである。そのことを実感したアーティスト・トークでした。(奥村一郎)



会場にはドット夫人も来られ、なごやかな雰囲気の中で終了しました。質問も活発に。

夏休みの宿題と美術館。定着してきた「美術館へ行くこと」。

夏休みの宿題が大好きで、楽しみで仕方がなかったという方は、あまりいらっしゃらないでしょう。むしろせつかくの休みに時間を取られ、二学期が近づくとつれて残った課題を前に憂鬱の度合いを深めた経験の方が、共感を持って語られるのではないのでしょうか。感想文のおかげで読書や作文が嫌いになったなどというのも、よく聞く話です。絵を描く宿題で図工や美術が嫌いになったというのも、同類でしょう。それでも夏休みに宿題が無くなることのない様子なのは、それなりに必要性が認められているということなのだと思います。

近年、その宿題に「美術館へ行くこと」が加わるようになってきました。

当館から学校に、来ていただくよう声をかけてもいるのですが、毎年夏休みの間

に宿題のプリントを持って来館される生徒さんたちが多くなっています。図画・工作や美術は、勉強する教科と思われていない節があります。その科目でわざわざ宿題をやらねばならないのは、宿題を課される当事者にとっては大変な負担かもしれません。といって宿題を出す側も、そのために嫌われてしまうのは本意ではありません。まずは美術館という場所を体験すること、そして美術の楽しみを学んでもらいたいと考え、展覧会の内容とあわせて、どんな宿題の出し方があるのか、先生方も勉強を続けています。

アンケートに寄せられた中学生の声をみると、宿題で初めて来館したという声も多くあります。昨年や一昨年の展覧会と比較した意見もあり、夏休み以外にも来館して欲しいと思う反面、夏休みという

機会だからこそ、内容をよく覚えていられるのかもしれないと感じます。中には、美術が好きになったという声があり、そういう人を増やしていくことが、これからの私たちの宿題になるのです。(アンケートには落書きも多く、個人的には笑わせてくれる内容を期待したいところだったりもします。)(奥村泰彦)



「かたちと色のABC」展会場での「子どもギャラリートーク」の様子。いくつかの材料を使って作品を見ていきました。

Museum Calendar

開館 / 9時30分～17時00分 (入場は16時30分まで) 休館 / 月曜日 (祝休日の場合は開館、翌平日休館)

生誕120年記念 川口軌外の歩み展

11.10(土)—2013.1.14(月・祝)

現在の有田川町に生まれ、戦前から戦後にわたって洋画家として活躍した川口軌外(1892-1966)の生誕120年を記念し、その生涯の歩みを紹介します。



川口軌外《少女と貝殻》1934

謄写版の冒険

卓上印刷器からはじまったアート

2013.2.9(土)—3.24(日)

手軽な印刷術を芸術の域にまで高めた昭和の謄写版画家、清水武次郎、若山八十氏たち。資料を含む約250点により、知られざるアートの冒険を紹介します。

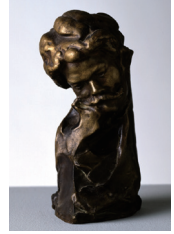


若山八十氏《風》1975

コレクション展 2012/13—冬

没後70年 建畠大夢

12.4(火)—2013.2.24(日)



建畠大夢
《若き日の北村西望(胸像)》1911

田中恭吉展にあわせて、オリジナルグッズが誕生しました!

こだわりのいっぱいグッズです。ミュージアムショップで、ぜひ手にとってみてください。

田中恭吉・一筆箋

友人たちと制作した回覧雑誌『密室』に発表した作品から、2タイプの便箋が交互に入っています。



「暮り日の鳥籠」
[etole de midi]
[真昼の星]
[自筆原稿のための模写]

3種
各350円

田中恭吉・ブロックメモ

萩原朔太郎に依頼された詩集の装幀のために葉包紙に描いた画稿から、植物や昆虫を描いた6種類を選びました。



500円

田中恭吉・マスキングテープ

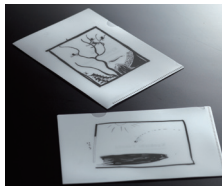
恭吉のモノグラムをデザインしました。



350円

田中恭吉・クリアファイル A6

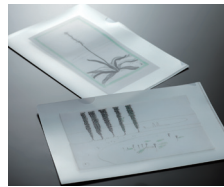
洒落なペン画から、涼しげなデザインに仕上げました。



「いのち」
「小とら」

2種
各200円

田中恭吉・クリアファイル A5

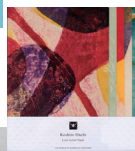


「HIZI」
「とげあるまへ」

2種
各350円

恩地孝四郎・便箋

恭吉の親友だった恩地の「抒情」シリーズより、5種類をセットに。



500円

メールマガジンのご案内

展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。ぜひご利用ください。



友の会会員
特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧 (同伴者1名まで)
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加 (美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
6. 版画の頒布会への参加

入会のご案内

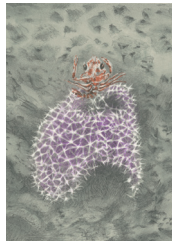
一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。Tel. 073-436-8690 担当:松原

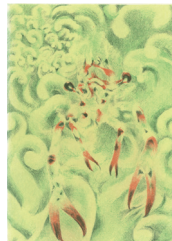
友の会版画プレゼント。今年は出原司さんの作品です。

作品テーマは、「チリモン」。毎年好評いただいている友の会版画プレゼント。平成24年度は出原司さんの作品です。4作品からお好きな1点をお選びください。(先着順、9月15日より引換開始)

いずれの作品も、2012(平成24)年制作。いずみ紙にリトグラフ、4色4版。限定各100部。



1 蟹飾



2 飾り海老



3 麦藁蝸



4 結昆布

出原司さんからのメッセージ

一番興味のあることは、命のつながりの中で自分はどこにいるんだらうということかも知れません。巨大な風景(を実際に作ってみたりしながら)の前に立ってみることも、生き物の営みの不可思議さを表現できないかなと思っています。生き物が生きることは、何かを犠牲にしているということです。親が子を守ることは、劇的で情愛にあふれる場面でしょう。しかしたとえ親が子を思う気持ちと云えども、別の視点からは心無い行為に見えてしまう裏腹さなどにも興味があります。今回は、あまり壮大な生や死を切り取ったような作品というより、通常は邪魔者になってしまうチリモンが子供たちにとっては興味深い可愛らしいものに見えるという、逆転の発想が気に入って作りました。そして実際は死骸でしかないそれら(とても見つかりにくいある種のチリモン)の生きている姿を、想像で構って作品にしたものです。

